「ジャーナリズムの現代」

【講演会】

11月7日土曜日、大学祭と同時進行で、第60回広島大学ホームカミングデーが開催され行われました。

総合科学研究科の企画では「ジャーナリズムの現在」と題した講演会がありました。

会。今回は、総合科学部はマスコミ関係に就職する方が多いとのこと

の世界で活躍しておられる先輩方が講演をしてくださいました。

今回講演していただいた総科の卒業生の方は、中国新聞社の北村さん、NHK広島放送局の上小城さん。本来ならば、静岡放送の渡辺さん、中国放送の藤原さんも出席予

たが、事件取材　た　た

北村浩司さん

昭和54　中国新聞社入社

昭和59年　編

庄原支局長などを歴任

平成18年　東京支社編集兼増設委員

平成21年　人事総務部長

大学時代はアナウンサー志望で、広大放送サークルに所属して　し　サー

の練　っ

カープ試合速報電話サービスのバイトをしていました。その時、デスクはいつも本社にいたため記者は楽な仕事だと勘違いしてしまい、アナウンサーのこと　い

ただいた中国新聞の　た

入社

れた仕事は暴力団の取材です。ある時市営住宅に組員が住んでいて、　に

している話を手に入れました。これは上司から、絶対取材しろ、って言われるから言いたくなかっ

取られて　られ　ら

「市営住宅を事務所にしているんですよ。」って言ったら、さすがに先輩の一人でもつけて

くれるだろうとか思ってたら、「おう、じゃ□□□□□□□□□□□□□□□□□□か聴いてこい」って言われて、聴いたら暴力団に凄く怒られて。のっけからこんな仕事をして　した

事件取材はやっぱり実際にやると辛くて厳しいです。今日欠席された中国放送の藤原さんも北広島町の方に朝一番から行かれおそらく何日も泊まり込んでいると思います。ああいう現場の連続です。相当寒い中放り出されて、ネタ取れるまでそこにいろとか言われることがあります。確かに厳しいんですけど、事件、事故じゃないと見えない社会があるんですね。例えば、政治にしても行政にしても、表向きは非常に綺麗だけど、実は裏には色んな問題があって、そのことが象的に表現　　な岡山支局にいたころですけど、小さな贈収賄事件があって、ずっと聴きこみや調査　　ていると、様々な事件の構図が見えてくるんです。そうすることで、日本の社会の末端の有様が、贈収賄という最初は小さな記事が調べて行けば明らかになる。更によく聞いてみると、その人の責任だけではない、色んな問題がそこにはいっぱいあって、その中でがんじがらめになっているという状況もあります。そうすると、誰かが一方的に悪いんじゃなくて、その人だけが悪いとはとても言えないという仕組みがあるということも分かってくるんです。そういうことを調べていくのは本当にきついことだし、もちろん罵詈雑言はいっも投げ　と
もありますが、本当に相手と気持ちが通じ合って「お前、本当のこと書いてくれるか」って言って、それまでマスコミから逃げ回っていた人が、僕の質問に一対一で口を開いてくれる、この快感というか喜びはやっぱりあります。一面的な見方で記事を書いていると、地域の人から、それまで敵対してた人達からも「よく書いてくれた」という反響はあります。その時の面白さは、この仕事以外ではかなか得ること　な　こと　と

庄原支局には4年間いました。人口は当時で2万人位のところで、農村地域がひろがっている所ですが、そこに一人支局って言って、支局長一人だけで、支局長という名前がついていても実際には私一人。家族で住んでいて、お客さんが来たら対応して、取材してっていう駐在　い　てい
た。もちろん取材して記事を書きますが、完全に地域と一体化していますから、自然と地域づくりのほうに力を入れたくなるんです。当時広
と地域に入ってもらおうと何か仕組みをつくりたいということで、ワークキャンプというものを計画しました。築250年位の
大きな庄屋さんの家を借りて、先生と、その先生のネットワークで全国の学生に呼び掛けたり、国際ワークキャンプっていうNGOを通じて、日本の伝統的な農村の生活を体験したいということで海外からも人が来たりしました。普段の生活では、ひとりで木を切ったりしても、誰も評価しませんし、儲からないし、きついし、危険だし。もうこんなことやめようかと思っていたら、世界中から来た若い学生たちが、梯子をスッと登ってパンパン切っているだけで、みんな拍手するんですね。本人からしたら当たり前だと思ってたことが、拍手してくれて。おじいさんたちが

気になって、「来年もやろう」とか言い出だしたり。それが形を変えて今でも続いてるんです。やっぱり外から来た人間だけれ違う目で、地域のもっと面白いことを発見していくのは、僕　の
いなことに色んなネットワークがありますから、そういったものを活かして、外からの力を地元の持ってる人たちの力と結びつけることが、私たちの仕事の醍醐味だとも思います。

　東京支社に
た
国会などを担当しました。ご記憶だと思いますが、福田総理が辞められた時に会見で、「あなたとは違うんです」と言われた記者は、私の直属の部下なんです。「あの記者は何者だ、どんな人だ、何歳か、どこの出身か、どんな経歴を持っているのか、で、お前はどう思うか」って他のマスコミか　　か
した。本人はいたって天然で、「いやあ、聴きたかったから聴いたんですよね……。」って。だけど、政権
材を続けていて、彼への取材は全部私が引受けるしかなかったんですね。まあ「前々から思ってたことを聴いただけです。」と応えておきました。そういう面白い経験をしました。

　しかし東京支局ではホント地方と中央の経済的な格差、意識の格差っていうのをすごく感じました。これが端的に現れてる言葉は「限界集落」
定義にはそれ相応の意味があって非常に厳しい中山間地域の現状を表すために生み出され
間庄原で仕事して、たくさんの仲間達に出会いました。その人たちはプライドを持っていて、ここに住んでいることに喜びを感じている。このことを、私は誰よりもよく知っているつ
□□□□□□□□□□□□□□□□□
厳しい現実というのがあるんですけど一方で夢と希望をもって生活している人達を限界集落と呼ぶことによって語ってしまうという中央のやり方に非常に疑問を感じました。そういうのは、住んだ人間や、体験した人間しか分からないってことがあると思うんです。それが、地方で仕事してきた地方紙の強みだと思ってます　　って
の時もそう
分があるんです。それをどっかで支えているって言うのはやっぱり山村とかなんですね。それがバランスよく存在することが日本にはやっぱり必要なので、そういうことを東京でもうちょっと真剣に考えてほしいなと思い

　そのあと、今の人事総務課というところに何故か来まして、皆さんの採用を決める立場にいます。就活とか対策の話はまた後でしますが、この仕事は楽しいので、一緒に仕事を
□□□□□□□□□□□□□□□□
面白い仕事　　い
もらいたいです。就職説明会とかすると必ず「発行部数は減っているんですが、大丈夫ですか」という質問が出ます。こういうときに私は絶対こう答えるんです。「それは分かりません」って。当時、山一證券という
学卒業して1年目の冬のボーナスが、公務員の父親のボーナスを越えちゃったとかいうニュースが出ていました。残念ながら今山一證券はありません。だからその会社が大丈夫か、未来永劫存続しているかとかいうのは、

誰にも分からないんです。大事なことは、その　　は
やりたいのかというのが大切です。自分の人生どういう風に作っていくのかというのが重要です。もし皆さんが今から進路を考えるのいただきたいですね。

上小城敬幸さん

平成2年　総合科学部入学
平成7年　ＮＨＫ入局（松江放送局）
平成11年　広島放送局企画総務室
平成18年　本部広報部
平成21年　広島放送局企画総務室
人事グループ

報道やジャーナリズムの最前線で活躍されている北村さんには到底私は及びませんので、テレビ屋ＮＨＫとしての仕事や、放送局の内情をお話しようと思います。

私は大学時代、真面目な学生ではなかったですね。あまりにも課外活動に勤しみすぎて、教授会で「いい加減上小城を勉強　て下さい」って私の担当教官が絶叫したと言われるくらい遊んでいた学生です。私が入学した　す　たて絶叫されたんです　て思いました　て　から遊んでいいんだ、と勘違いしてました。後から先生が「よく学べ」って言うの加え忘れたっていうことなんですが、それはそれから5年間総科でお世話になりまして、遊びすぎで研究室追い出されて指導教官が変わったり、結構問題児だったのかもしれませんけ　ん　ＨＫに　ＨＫ志望した理由というのは恩師の学部長がＮＨＫの番組審議委員の一人で、お前　で

やってることはＮＨＫの中でも活かせるんじゃないか、という雑談からです。だから最初からＮＨＫに入りたかったとくて、皆で1つの物を作るのが楽しいよね、というのが活かせるのが放送やイベントだったので、ＮＨ　た　で　実　うと番組を作りたかったんです。ディレクター希望で入社試験を受けたんですが、話してい　、　ーでしょう、　う　、メントするほうじゃないんですかって言われて、ＮＨＫの放送管理という所で採用されました。学生の時はまだジャーナリズムが何だとか番組作りが何だとかはあまり分かってはいなくて、やはり僕ら番組を作っている側からすると、皆で担当があって、皆で持ち場があって、皆でなん　ん　な　、赫話し合いし、取材に行き、助けてもらいながら最後1個のものを作り上げていくという醍醐味をすごく感じます。これは大学の時のオリキャンやソフトボール大会をやか、そういった物の中に通じることであり、皆で1つのものをつくるのが快感であり、番

組を通して感動する、困っている誰かが考えるきっかけになる、自分達が作ったものが最終的に世の中の人の　に　の　り返されることによって仕事がどんどん面白くな　く　せ　かけというのは総科にいた5年間で活動して得たものが、全てＮＨＫでの仕事の中で色々と活かされているなという風に思います。

マスコミの初任はだいたい地方局勤務になります。そしてちょっと規模の大きい所に行って、東京に行く、もしくは地方に帰ってくるという異動です。私も島根の松江　で事をして、何度か番組を作る機会をうかがっていたんですが、まずはお前が　こ　やってから、ということを言われましたので、私の担当は経理とか総務全般で、経理は当然お金の管理を司っているわけですから、□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□組を作るに当たってどのようにお金がかかるのかを考える部署でした。あとは総務全般なので、電球を替えたり、局内の役に立っていくという雑用を4年間会計　、　とと　やりました。それから広島に異動し、広島では番組をプロモーションしていくというか、作るのは当然現場のディレクターなんですが、それを局の方針に沿って、広島放送局の今年の目玉番組を考えて、プロの才能をそれぞれつなぐコーディネートをしていく、繋いでいくという仕事をしていました。

東京に行ってからは、マスコミ対応の仕事をしていました。ＮＨＫの会長の会見の準備とか、広報担当の中でも、会見を担当して同業他社のように、取材される側になりました。折りしもその時、ＮＨＫは不祥事の嵐でして、ごめんなさい会見ばっかりで「受信料支払いやめます」といった電話が毎日何万件って　って　、　っ　てきて、「すみ　て　てお返しします」という風にマスコミの対応をしてました。マスコミなんだけどマスコミに対抗する立場におかれまして、ＮＨＫだけのことを考えるんじゃなくて、テレビ界全体や、新聞などの活字メディア、ネットメディアなど、あらゆるメディアとの窓口をし　した。また、会見　だ」とも言われました。その内容は、「とにかく雑誌を読め、確　文字が出てきたら、お前は全部付箋を貼ってコピーを取れ」という仕事です。付箋をつけて、不祥　れ　て　たね。当時僕は会社を守らなくちゃいけないと思っていたんで、「ほとんどの人は頑張っているん　か　い　る　い　う気持ちなんだけど、その1週間後「おたく□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□すよ」「紅白プロデューサーの着服」だとか記事に一杯出　に　箋つけて切り取って、デー　ーベー　て　役員室に「こんなん出てましたけ　て　持っていって。とにかく来る日も来る日も雑誌に新聞を読んで、で、普段の取材を受けて、会長が国会に行くと当然記者さんたちがバーっと来　っ　がここに立ちますから、皆さん、この範囲で囲んでく　か　て　た、新聞当番っていうのがあって、週1回、朝5時に渋谷の放送局に行って、新聞を20誌くらい読む　い

テレビ会社なんだけど、部内新聞屋みたいな役割も

視聴

事を切抜いて、手作業でＢ４の紙10枚くらいにまとめて役員室に持っていって、全国の担当に配信するという仕事もしました。マスコミでありながら、マスコミ対応して、自分達の会社をどう見るかという仕事を２

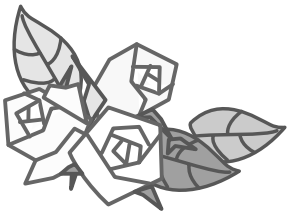
て、こうやってニュースや取材はできるんだなと感じることができました。

そして広島に　そ　し

ています。ＮＨＫの仲間になってくれる人を探す担当であり、かつ職員が働きやすい環境を作る労務管理の仕事をやっています。ＮＨＫは良くも悪くも大きな会社で影響力もあるので、そんな会社のなかで、いかに良い番組というか、あの番組よかったねといった番組をつくることができる環境を作っていくのニ番組があれば僕も作るチャンスをもらって作ってきたりしました。とにかくなんか放送のコーディネートをしながら番組に携わっていきたいなと思って毎日仕事をしながら、虎視眈々と番組を作ってやろうと考えています。

新聞社にしてもテレビ局にしても、社自由を持っています。１つのものを上げて、チームワークで仕事をして達成感を得るといった仕事の連続です。すごく泥臭くて、華や

地道な作業の繰り返しで、最終的に１つのものができるという仕事なんで、総合科学部の人は結構多くて、広大もマスコ　は多です。とにかく幅広く活躍されていますので、親和性があるといったらおかしいですけど、広大総科とマスコミは繋がっているなというのは今でも感じています。



【質疑応答】

【質疑応答】

Q　入社前、学生生活では、新聞や雑誌はどれくらい読んでいましたか。

A

〈北村さん〉

中国新聞でアルバイトしていたということもありまして、新聞は相当読んでました。雑誌は週刊文春や朝日ジャーナルなど読んでいて、完全に　し　。

〈上小城さん〉

新聞はカープ欄から読んでいました。別に就職活動のために新たに読んだりはしなかったですね。興味がないものは軽くでしたが、隅々まで読んでいました。

Q　総科の生活の中でジャーナリズムに役立ったものはありますか？

A

〈上小城さん〉

ソフトボール大会は案外手間がかか

が役割をもって、自分達がプレーしながらも全体の運営をして、怪我してないかなとかえたりして、最後にはお疲れ様と言って学生会館をビールの海にしたり。それが終わって、皆が役割分担したしたものが1つになったのを見届けて、結束を改めて感じたね、っていうのを実感して一つのものを作り上げたということがわかりますね。これがジャーナリズムにどう活かされているかというと、自分が気持ちよくなるためにしているんだけども、それでみんなが気持ちよくなって、何かみんなの役に立っているというというのに繋がるのを無意識に思っているんでしょうね。そういう意味では、今のＮＨＫの　　では、本当は自分がやりたい番組なんだけど、あなたにとってもいいんじゃないんですか、　たいなことで役立っているんじゃないかなと思います。

〈北村さん〉

色んな勉強ができますよね。色んな失敗もしました。でも、どれ一つとして人間がやるこ　　こ

の基本的な考え方というのは、総合科学部でみつけたんじゃないのかなと思います。当時学、生態学などの講義に顔を出していましたね。話は分からないんですけど、面白いんです。だから、自分がこの道だけはって思わないこと。恐らくこの方面にはそういう人が多いんでしょうけど、そういう意味では総合科学部というのが基礎を作ってもらったなと思いました。

Ｑ　採用するならこういう学生がいいな、こういうことを大学で学んできて欲しいという希望や、エントリーシートの書き方などをお願いします。

Ａ

〈北村さん〉

一番はコミュニケーション能力。残念ながら学　　学の人間関係と社会の人間関係は全く違います。大学は自分と心地良い人といれば済む訳です。でも社会は嫌な人と毎日顔を合わせないといけないんです。警察担当の時、副所長に取材しよ　し

を、全部私にぶつけてきているんじゃないかって思うような人がいたんです。でも辛抱　　ションとれるかも」って思う瞬間が訪れるわけです。やはり真剣にぶつからないと、相手は応えてくれない。付け焼刃の笑　は　　な□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□いといけません。そういう本当のコミュニケーション能力を身につけないといけないと思います。これは、全生活をかけて頑張ってください、としか言えません。普段の生活から1歩も2歩も踏み出して、色々な人と接すること。同級生でも先生でも事務の人でも構いません。日本語は通じるけれども、自分の共通言語がもてない所に入ってコミュニケーションを取れるかというところをやっていただきたいです。

それから、自分の頭で物を考えること。面接では、何かに書いてあることをチョロチョロって言うのがわかります。そのことに突っ込んでいくと、脆くも崩れるんです。1つでも2つでも、小奇麗で　　んで自分だったらこう伝えるというのを言ってく

ださい。常　　だ
だったらこうするという習慣を身につけて下さい。

〈上小城さん〉

大学は蛸壺社会とも言われるように、等質□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□わっていかなくてはいけない。違う考えの人と交わることが大切です。やっぱり楽なんですよね、仲良しは。会社には話したくない人と話したり会いたくない人と毎日顔を合わせたり、嫌な人と喋らなくちゃいけないんだから、それ自体がプレッシャーなんですね。だから　集　から
とが必要です。

それから、面接の段階に行く人っていうのはエントリーシートに「これ
い」と思うような項目がある人です。私はこんな人で、こういうことができます、とかは読まないです。これをしましたとは
です。でも、で、どうしたのかは書かないんです。それでどうしたか、何を感じたか、を聴きたいんです。そういうところを書いてもらうと、「おお、聞いてみたい」と食いつきます。そうすると面接が展開するんですね。ここを詳しく聞かせて　か　か
しか書けない自分の経験を自分の書き方で書いて欲しいです。

最近は、「あなたの失敗はなんですか」とか書かせてます。　て　さ
あれ、失敗しても首をとられたりしないんです。だからこの4年間で大きな失敗をしてください。そして、この失敗からどんなことを学んだのかということを見てますね。

面接は
聴きたい、の連鎖なんです。

Q　総科は違う領域の人と触れ合うという特殊な学部
は生かされましたか。

A

〈北村さん〉

文系理系は決定的に考え方に決定的にちがうんです。そういうことで色々話したりしましたね。やはり異領域と出会うことが大切です。

〈上小城さん〉

まずは友達同士でそういうが始まりますね。理系なのに今は哲学していたり。そういう友
です。それから、それぞれがたくさんの方法論を
をしていくということを知ることができたのは大きいです

【アウトライン－懇親会】

講演会　　会

ました。講演会とは違い、講演をされたＯＢの方も交じって、お茶を飲みながら和やかな座談会となりました。在学中の話やさらにみ込んだ業界話など、話題が尽きず大変盛り上がりました。

講演会、懇親会を通し、総科のつながりというものを実感した日でした。司会を務められた岩永先生がおっしゃった通り、答えだけじゃなく、世の中の問題をどう設定するのかが総科のある所ではないのか、と改めて実しました。

【担当】21生　林田　啓誉